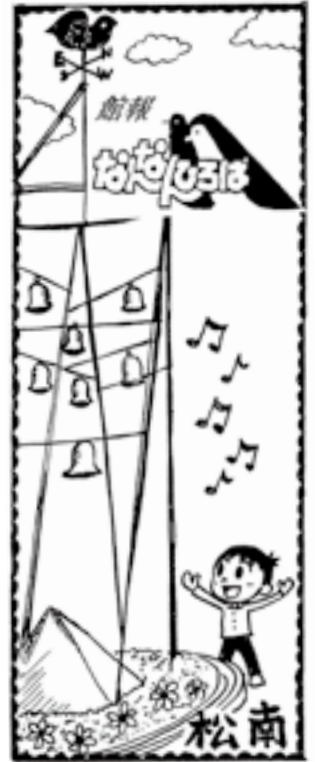


コロナの影響、直撃を受けている地域の子供行事、今年も三九郎も芳野町・南松本一丁目町会合同の「お焚上げ」形式となりました。本来に残念、櫓を組んでしつかりやれるのは、いつになるでしょう。

松本城主小笠原氏の二代目康長の幼名に由来するといふ「三九郎」、土地によりいろいろな呼び方をされる小正月の行事です。その昔は子供達の基地遊びの様相もあり、年中行事でも最大級の催しでした。本当はそんな逸話も現地で話してあげたいのですが、二年連続の自粛でした。松集めも高学年のみ、焼くのも各家庭の自主参加、この分だと春の歓送迎会も、夏の青山様・ぼんぼんも、果ては「なんぶ未来まつり」までもと考えると、辛くなります。一時も早くこんな時代を越えたいもの

▼コロナ禍、子供達の伝統行事は？



と願いつつ、三九郎を済ませました。

松南地区では双葉西・双葉南町会合同で三九郎が行われました。しかし翌日に開明小学校校庭で予定していた町会はすべて急遽中止となりました。地区内にオミクロン株の感染が判明したためです。子供達の伝統行事をどうするか、多面的な検討が問われています。

(百瀬 壽)



芳野町・南松1丁目合同「お焚上げ」

▼来年は



町会やPTAの役員さんが、実施に向けて準備してくださいましたが、コロナの地区内感染のため、宮田中町会の「三九郎」は中止になりました。

スーパーには藪玉用の小枝がありましたが、藪玉を作って、心待ちにしていたご家庭もあつたのではないのでしょうか。「無病息災」を願う新年の伝統行事が、コロナという禍で中止となったことは、寂しく無念のことでした。

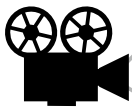
お餅や藪玉を焼いて健康を祈ったり、お習字の上達を願って半紙を燃やしたり、地域の伝統行事は、そこで育った者に、忘れられない懐かしい思い出を共有させてくれます。

来年は、「三九郎」の炎が正月の空に燃え上がる年となりますよう祈りたいと思います。

(石川 博子)



双葉西・南合同三九郎



開明小学校2年1組が映画を作ったよ！

1年次の「ダルマのお小言」に次ぐ第2作目「帰ってきたウルトラ魔女」が自主制作されました。

全員が出演し全員で役割分担した作品は、まさに皆で作った映画です。子ども達の底力と連帯感に感心しました。将来が楽しみな子ども達です。



新聞各紙も紹介



校庭でキャンプファイヤー



6年生ダンス「ソーラン節」





地域の足をどうする？

1月21日、「まつもと公設民営バス」意見交換会が開かれました。宮之本副市長ら当局からは、次の点が説明されました。

①松本市・山形村・朝日村を含めた広域で、持続可能な「社会インフラ」を築く。

②渋滞解消、事故防止、脱炭素社会など「自家用車依存からの脱却」を目指す。

③有償ボランティアなど地域資源を生かした「ラストワンマイル」構想の実現 など

以上を理念に各種調査を反映し、バス路線の大幅見直しを提起されました。当地区では、左図のとおり、南松本駅―石芝町―平田駅路線が示されました。なお「特定1社と5年契約」とし、令和5年4月から運行予定です。



質疑では、理念や路線提案の根拠への賛成論、「通勤はバスで」を前面に出したパークアンドライドの推進論、デマンド交通への期待などが出されました。

高齢者の運転免許返上が問われる今、「足の確保」はバスだけでは対応できません。通院・買い物弱者への有償ボランティアは、当地区でも実践されています。それを持続可能な移動支援にするためには、利用者への手厚いチケット配布や支援団体への助成なども考えられます。ボランティアを「お互い様」行為とするために、ポイント制を導入している自治体もあります。福祉の充実のために、多様な方策が求められます。

(白澤 幸男)



宮田西町会文化祭 (展示のみ)



ボランティア松南「長野研修」



利用者の会「冬の文化祭」

第37回 松本市公民館 研究集会

2月20日、「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い」と題し、2年ぶりに開催されました。開会式や基調講演を含む全体会は、中央公民館よりオンラインやYouTubeで配信するハイブリッドな形式で開催され、なんなんひろばも分散会場となりました。

「コロナ禍」を逆手に取った方式ですが、アフターコロナにあっても有効な会議形式ではないでしょうか。松本のように35地区と広域にまたがる所の公民館活動では有効で、今回はまずまずの手応えであったと思います。

4会場6分科会はその「なんなん」会場

それぞれオンラインを活用するなど工夫し、事例発表や意見交換が活発に交わされ、盛会のうちに終了いたしました。

(百瀬 壽)



●心に響いた言葉

コラム松南

テニスを始めて約一年半に。当初は若い頃の記憶のまま体が動くと思っていた。しかし長い年月の間、運動をしなかった体は急な動きに悲鳴を上げて、足の肉離れを起こしてしまった。記憶と現実の大きなギャップに悔しい気持ちもあったが、仕方ないと受け入れるしかなかった▼テニスを始めたきっかけは、ある本の『残りの人生で、今日のあなたが一番若いのです』の言葉が妙に心に響き、諦めていたことも挑戦する気持ちへと変化させた▼田園画家で有名なモーゼスさんは70歳を過ぎてから絵を描き始めたとのこと。何かを始めることに遅いということはないのだと後押しされた▼練習で教えられたことが習得できた時、年齢に関係なく上達できるものだと改めて実感した瞬間でもあり、今や私の喜びや活力になっていく。

(村口 淳子)

